

指導者として大切にしたいこと

2019年4月

広島地区ミニバスケットボール連盟

副会長 大庭 浩 資

いよいよ「平成」が終わりを迎え、新しく「令和」となる年度が始まりました。

各チームにおかれましては、新年度の登録も済ませ、本格的に新チームとしてのスタートを切られたことと思います。

今後、ミニバスケットボールの世界も、いろいろな改革が行われますが、指導者一同、丹会長や上田理事長のもと一致団結して、広島地区のミニバスケットボールを愛する子供たちのために、お互い頑張ってまいりましょう。

本年度も、どうぞよろしく願いいたします。

さて、先日、以下の記事を目にしましたのでご紹介します。

文中にもありますが、ここに書かれているのは野球というスポーツならではの考え方もかもしれません。しかし私には、ミニバスケットボールをはじめとするすべてのスポーツ、さらには日頃の生活の指導の際に必要なことが書かれているような気がします。

よろしければ参考にしてください。

「前書き」

“日本一熱い監督”といっても過言ではないだろう。それが、今治西の大野康哉監督だ。グラウンドでは決して座らない。「偉そうに見えたらよくない」と腕を組むこともしない。自ら声をからし、選手と一緒に汗を流す。冬場のトレーニングも選手につきっきりで声をかける。メニューを与え、やらせるだけの指導はしない。選手と一体となつての寄り添う指導がスタイルだ。

熱血指導が実を結び、公立校ながら2006年から12年にかけて7年連続して春夏いずれかの甲子園に出場。環境や素材の差を言い訳にせず、チャレンジし続けている。そんな大野監督がピンチで心がけていることとは？

「やるべきことを明確に、迷いをなくす」

三振した後に、「インコースにストレートが来たんだから、次はアウトコースにスライダ一だろ」と言っても意味がない。ホームランを打たれた後に、「あのバッターは低めの変化球は打てない」と言っても遅い。

どんなことを言っても、“事が起こった後”ではどうしようもないのだ。大野監督が心にかけているのは、大ピンチの前にアドバイスを送るということ。満塁や二、三塁になってからではなく、一塁や一、二塁の段階で伝令を送ることがほとんどだ。

「大ピンチを未然に防ぐ。大きなピンチになる前にいかに芽を摘んで切り抜けていけるか」

「戦い方として絶対に欠かせないものだと思ってますね。1点を取られても、1点をやら
ないという感覚です」

大ピンチになると、選手たちは余裕がなくなる。重圧がかかり、言葉が耳に入らなくなることもある。それも踏まえて、冷静さを保っているピンチのひとつ前の段階でアドバイスを送るのだ。初めて監督を務めた伯方時代には、苦い経験を何度もした。当時は、「試合の後半は何があるかわからないから」とタイムをあとに残していたが、伝令を温存した前半に大量点を取られて、流れがつかめないうまま試合が終わることが多かった。そのときの教訓も踏まえ、現在は早めのアドバイスを徹底している。

「結果が出た後にどんないいアドバイスをしても何の役にも立たないと痛感しましたね。それだったら、プレーをする前にアドバイス、指示をしてあげるべきだと。他のスポーツではなかなか難しいですけど、それができるのが野球というスポーツですから。監督はアドバイスのチャンスを与えられている。言ってみれば、監督と選手の間だけの秘密のアドバイスです。そういう気持ちでやっていますから、場合によっては、タイム3回を折り返し（5回終了）までに全部使っている場合もあります」

高校生が弱いのは“想定外”のプレーが起きたときだ。自分の頭の中になかったプレーが起きると、真っ白になり、とんでもないプレーをしてしまうことになる。だからこそ、今、この場面で何をすべきかを確認する。アドバイスを送ることで、選手たちに安心感を与えるのだ。

「悔いが残るといのは、やらなければいけないことをやらないことだと思います。監督も『ああいうふうに言っていればよかった』と悔いは残さないようにしないといけない。タイムを使い切るといことは、悔いはないといこと。その代わり、反省はありますけどね。自分で言ったことが間違っていれば、それは選手に謝るしかない。でもアドバイスするのをためらって、言わずに出た結果について言うてしまうのは、評論家であってそれは監督ではないと思います。」

試合では、守りのときのほうが相当集中しています。下手したらその回で（試合が）終わってしまう可能性がありますから。間違いなく、守備のタイムのほうが先に使い終わります。3回使い終わったら？ あとは声をからしてメガホンで言ったらいいんです（笑）。伝令では『この場面はこういう考えで守ろう』と伝える。いろんな選択肢がある中で、どれだけそれを絞っていけるかが大事。それは、選手から見るとやる事が明確になっているといこと。ウチのチームでは、一番大事にしていることですね。」

やるべきことを明確にする。迷いをなくす。これが監督の仕事だ。もちろん、攻撃時の伝令も積極的に使う。甲子園で三度の攻撃伝令を使い切るのは大野監督ぐらいだろう。

「やっぱり、3年間つきあってきてますから、こういうときはダメなときだとわかるんです。ダメだと思うから（伝令を）行かす。必要がないときには行かせません。」

毎日の練習や練習試合で選手をじっくりと観察しているからこそ、結果が予測できる。嫌な予感がすれば、躊躇なくタイムを取ってアドバイスを送る。プレーが終わってからでは遅いからだ。「先に『こうすべきや』と言ったうえで、それができたかできなかったかを評価するのが指導者。選手のプレッシャーを取り除いてやる。監督の仕事はそれが一番だと思っています」

狭くなりがちな選手の視野を取り戻す言葉。頭をシンプルにし、やるべきことを明確にする言葉。プレーがかかる前に重圧を取り除き、集中力を高めてやる事が監督のもっとも大事な仕事なのだ。

※ 本記事は書籍『やる気にさせる高校野球監督の名言ベスト 66』（ベースボール・マガジン社）からの引用です。掲載内容は発行日（2018年6月15日）当時のものです。